



之
結
目
指
送
月

特別
イ 4
3163
35(4)





海壇貝拾送雜款下

大堀綱先に寄るけり

此一軸ハその美事なりんといふ時海壇友人
そも又一重復院乃杜るの事なれども送りし所
て蓋してゐるのみり序又かくるゝ
分也其後年月を以て又の初の色に調を
積りし船のつらりとおぼゆるくし沈むる
けり一ふりし法又おぼゆる及古も乃
中又更りてたゞし作りて是を見ればとありて
人のえさをしけりしハ文字のたゞし清うせて
ありしをぬきしはたゞし中しありし
ゆりしはたゞし徳光ゆりし何れも

いふより後の法法の如海に影をみぬれ大り物のやま

三車

けりてくまのひらけ花車みちひくすの白ひけり

法隆寺一聖二皇院郭の古村より製した短尺板

いふがやあめさ川させまとのくあつらめけ影をさるひ

興福寺の焼強りの古村を作りし観衆さ書

花火の煙もれしあはれはあつらひのひけり

義士小野寺重内観衣手と号に蟬乃形あり

世要抄流り

武まおきの名のいづれくは玉のちひしきよ

みよのいれ松林梅あるにかつらあめ

枝ねつらつまておしねも二葉のひらけ

森はま竹はちひらの陰をぬよまき人のちらもさるく

板をけま白ひはくし松林の幸盤のつらひ時をさるま

大まろあまねあり

十より花さるさりにくまきちをはつらめつらね

法隆寺中村氏の書

中野應雅者人妙喜庵よりよみ水盤二基

茂ゆく文より又喜庵を造りて庵中より

其一と橋本と号する西水法師より得る

他名よりあつける傳へかの庵のたきまひすつ

はまの志よりあつる巴も年を移ゆ

はくすあれるあるねんいひさか

はけり

すくや 昔那の契れり巴の國に ありおのむら
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
木の枝をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
それおのむらさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

うさやま 巴の契れり巴の國に ありおのむら
小まら

名の如く海のひまなはまもさうさうさうさうさうさうさう
お中 のあふつ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
空也堂踊念仏

ありひささもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

藍江の画 岩の上の船さうさうさうさうさうさうさう

はうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

雲の枝ありおのむらさうさうさうさうさうさうさう

みさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

猿ひり 枇杷の枝さうさうさうさうさうさうさうさう

よさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

大なる橋あり

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

鴨さうさうさう

あふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

小町

うらうそ世ううのいさきみ水きそいぬれのうらうそ
根引おちりけり

いぬん人のちやいひれんそやけううのうらうそいぬれ
二股大根崩せけりお 神子よんそい

特うけらるるあまひくまのげおおのそいぬれうらうそ
頼阿う作けり西の像をおく堂の板う押

料ろあ

棒ういおけんおさうあまおのそいぬれうらうそ
いぬのうううううううううううううううううう
うううううのたふくううううううううううううう

あま

おううううううううううううううううううううううう

ちうひまのうらううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう

又下又月書あ

日かおすのうらううううううううううううううううう
又ううううう

おのうううううううううううううううううううううう
草又あうううう

かいらう

乾坤乃第のうらううううううううううううううううう
山上信長七種のう
和鳥ハううううううううううううううううううううう

秋のよふ小庭のよふを思ふにさし

何れもあはれしむるよふの夜秋のも秋のよふのよふのよふ
波上獨鶴のよ

さうねのよおあつたよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
よふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

山のれうまめあつたよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
山のれうまめあつたよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

梅柳渡江春の園
梅柳渡江春の園

月のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
月のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

老のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
老のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

羅陵のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
羅陵のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ
水のよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふのよふ

競馬

それを見る心の駒はまた見たるすあはれひや林もろくしん
たちらん

水原よちかろしほしん花蓮ひけし時を去人さゆき
あもよほしんさうさ

澄りたひしんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あしんあまの心しんあまの心しん

さあさああまの心しんあまの心しんあまの心しん

花

花のまはれあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん

亀の書画は書

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

あまの心しんあまの心しんあまの心しんあまの心しん
あまの心しんあまの心しんあまの心しん

孟作んまゝ画のやうな好まれし心づかひ
 をほしきくえ燈ねまゆつたをむすくその
 ちまたのせんをたしめしつゝ遠くさうらうを
 へくまきくさすのぢり宴に作り用ひられたるは
 じもくめしききりまのこりうされいその下倫
 乃教りひあんを神しそ聖又物まゝ押さ
 へんまゝいさう其やういふくをあらまするを
 たちねのおや子とわい 孟は心さしともいふはとを
 紀の國より出たる所なり貝秀合 珍書と稱す
 ま志られしは漢又あさりしそ其玉得たりゆされ其
 お解く伊勢女大略
 神をのりせの漢よりゆされハ蓋はたのりしもの
 孟作んまゝ画のやうな好まれし心づかひ

備中園とみの酒惠の池のこころをりきて傳んと
 孟作んまゝ画のやうな好まれし心づかひ
 柿本乃神像頓百轉とのひ傳るりのハかの河
 秋の道志深しりしは恒吉也やしるる祈り
 七年へくる秋の流木をたぐめし其像を作
 奉り飛鳥寺にすゑおきせられし人よりみし
 へりしとぬん藤野氏おいつきはうらるも其一
 集しし孟作んまゝ画のやうな好まれし心づかひ
 乃作守りにもことなれしつゝあしんつゝは前
 備へなるしそあはれおくこし集めぬに己
 孟作んまゝ画のやうな好まれし心づかひ

昔もこのころに葉子りの神風はるに吹渡り

金煉の板交の杉を伝ふる硯の影

舟日とすよれ板交少ししに其をむしとよれまのそん

おの福せらふの夏うら

おのそん其れこりけにけりよらんゆきばおの影を

小松のしん

はつたのしんあまたあわれハハまられちせの影の影代

庭又らんのかみあり

明くそんあそいりよあけにえのうらまをひんあれ

松一枝とあり

一えはこもちせのかけをんて標違又思ひこもやれ

葉せん賣えのころり

よめれふもあえのころりあそいこもあそい

猿の子やうきあか

れまくと人よまおまあれまのきたらと後のみそん

叢の菊

こもはよりあそいみれハハれあそいこもあそい

万葉抄あり

こもはよりあそいみれハハれあそいこもあそい

大原は幸のしん

かこもあそいみれハハれあそいこもあそい

船中よそ書さしん

山根あそいみれハハれあそいこもあそい

あそいみの都のハハ

子代とて一市おけりてあさくは花ハ重九と申すれり
浦月お報傳る

久しお月もあつてあつたおもとをとおとせ
玉川衣也

おんころおもおぬあつたにうらひおもあつた
またくおんれさや

あつたおのりつたおつたおつたおつたおつた
茶乃花枝又つた

おしつたおつたおつたおつたおつたおつた
浦月お報傳る

おつたおつたおつたおつたおつたおつた
おつたおつたおつたおつたおつたおつた

久しお月もあつてあつたおもとをとおとせ

大は画 松次奴 藤娘 吉老の月代かき交せ

おつたおつたおつたおつたおつたおつた

あつたおつたおつたおつたおつたおつた

おつたおつたおつたおつたおつたおつた

おつたおつたおつたおつたおつたおつた

椿 一枝

だもねのけしきのりかたをいせむきよきよにけ

傘のうら書かす

は傘人よかきしをれいふまもむれぬあ

いりけいふまもむれいりけい

今一はむい後まかたさたしをたつらむれ

あも人びらひえふあま

けりもひくまゆまゆまゆまゆまゆまゆ

宗匠人の書く茶籠のうら書

と地もひひくぬ玉籠書し雨も免屋の河霧

ゆれはししし書かす

ゆれをひひく野舎の書くけりはははは

桔梗をみまししれもかきま

けりおれむむむむむむむむむむむむ

花のむむむむむむむむむむむむ

花のむむむむむむむむむむむむ

夏の夜男が海をむむ

まむむむむむむむむむむむむ

花のむむむむむむむむむむむむ

むむむむむむむむむむむむむむ

雲のむむむむむむむむむむむむ

まあむむむむむむむむむむむむ

まあむむむむむむむむむむむむ

あむむむむむむむむむむむむ

あむむむむむむむむむむむむ

梅の枝をあらまひ

さく花先をあらまひけりうらひやまをいそがし

柳をすそめ

つげらゝめと柳をすそめや柳を行ふ雀の家

庭の蝶

庭の蝶をあらまひては花とまをあらん

朝日乃下に元日まをあらまひては花に

いとせしあは中に

家代のまをあらまひてはははははははははははは

もろくもろくもろくもろくもろくもろくもろくもろく

七文天漢をあらまひ

三河のうらまをあらまひてはははははははははははは

西のうらまをあらまひ

うらまをあらまひてはははははははははははは

梅の花をあらまひ

今もふれまをあらまひてはははははははははははは

海の家をあらまひてはははははははははははは

梅のうらまをあらまひてはははははははははははは

ほとけの指と月をあらまひ

大なるうらまをあらまひてはははははははははははは

帆をあらまひ

帆のうらまをあらまひてはははははははははははは

梅のうらまをあらまひ

花の風を吹かしし梅花人の心とてはる梅の心

さよにわさる

いほりうとまは舞のころにれはさのの葉も花もあひてはるん

錦より多きは船魚二葉とてまに雀さるる

船もれもまらもほまおのんちよとてはるまにさく

うめよさせる梅

おれのをさつたさる梅のされさよらそふ代や入

槿花よりうらやまのりい

船形のみも常盤よりいよりみかけうめれんもはるん

梅よりさきさる

梅のえよまあるらめいさくはるも待てはるんさるん

雪のちん月おちと舞さる

かこまきく月影くくくはりのあはれまよふん

紅梅に白梅のけしん

やまのちまきくくや梅のむこもれ梅と先をたえ

あさみのりい

かこげりうらねつくくさののろを誰うあさみとてはるん

急ひも頼つてゆは

大みきはみまをいつてさくまはるんせんいふわの神

白椿

一梅れさくつてまきおとはんも世乃もはるん

樂焼梅娘茶碗の

うらなれこののよはるんあさるはる梅とてはる

はるの造く花の繪く人まきさるや詩

うに井あり其水他より汲るべしつらと清く所々も茶
乃湯にゆつあや一湯くめし汲ちやを奉りて其より一徳
子後もとむるをくわめく徳をさんと見るに水の清
きよりより一まはつらさるる一されハ何うか井それか此
あつたは藤原のみ井天のみけ日れにけとけ一野中れ清
如おららの水邊坂の實にならんとす一ひもその心を
寺の人をそれくぬやさけく山一ち大和のことたは喜ん
中にひくけく流れくる川もほりおる水もさくくさようぬ
ハくくぬくめん流美あつた大く新はりれあつぬる
可くてもとより海のちちをれハお葉のまは徳をばとら
下は其根のまはこも一わらわらハのたわらわらくたえて

得たまは清水水取の湯をく申につまもまよまをさくむるハ
雅やまくにるゆる中よ濁るきをうるのひかき一まもかき
小堀宗甫君士れおち穂と号く一茶入をこそまはけり也
とつひまのく今これゆをぬりしるるハかの器のたぐひハ
あつて人をたそけ物とるすれ功あつてうまうまうま
あめれたすおま一そく一れに金れうからゆるうまうに
何れハあま一ふくくめしてやまも人もむ(ぬ)か
名に一おろ田中れ井戸れ庭まみひるるるるるるるる

誠拙和尚乃初集跋

東海和尚のおおせをうけく故淡拙大徳乃みまく若干首
くきよあくハ日のぬまをくけをまの奉るゆえハ大徳ハ
世又志くくまみえまら一ちれまにたりるるるるるる
在焉居士

今にたりやせんといふ一したる又先とらてし
あるをよみのこにいつかしてはく世脈とんす
其人を言ふに言あれりやいふや又いふ

丹野三木氏著錢話序

石をあるくも人あり金をとるたのむ人あり
るもあまよくやいふはれ、樂れきもあつねと其人を
や一為はれよ言のれこつたの罪れありと文字れ
くもくもさうて古くおゆるものれ、これをたのむ
人やあし、後ハ石為のたういふはあそ都又ひまに
高きや一き世名まこえるの教をきつてあつた
とあまよくいふのとせよ、書る人精る時其の意
まうた、一く傳へる、一せれ、一實と用る、一

りのれん、ハ好古の輩の玩れ、志くものこそあつた
く、三木ぬ、一は、いされ、る、錢話、の、書、を、み、に、も
とら、弄、錢、は、心、あ、り、一、身、は、何、う、れ、歎、の、こ、う、ま、も、志、と
う、如、一、と、つ、も、ひ、り、く、一、の、せ、れ、る、功、ふ、く、好、む、志、は、
か、思、ひ、は、り、ま、ゆ、一、せ、き、ん、お、の、き、む、け、よ、あ、か、り、一、と、伏
見、る、も、あ、あ、や、う、ほ、く、と、一、せん、と、ま、ま、あ、ま、和、銅、乃、成、り
う、を、と、ひ、り、ひ、り、て、舟、乃、中、れ、つ、れ、一、文、字、の、や、う、乃、を、れ
し、る、と、金、色、れ、う、け、ま、を、と、る、を、れ、世、の、む、り、一、又
う、り、白、泉、川、の、流、の、東、流、か、な、り、も、と、あ、く、こ、う、り、を、も、ひ
う、り、心、つ、ま、を、つ、り、一、今、錢、話、を、よ、は、れ、和、銅、も、その
ま、の、に、あ、ら、う、け、一、され、を、ほ、り、れ、き、一、も、捨、や、ら、し
年、ら、ら、の、ひ、ま、む、と、い、お、よ、た、り、一、を、取、り、入、て、こ、の

あみりつしきあしき

お代くとせむく時をいぢりきあはれ後さやうし

石崎女お業可しき

卯日のけりつゆり女ある藤之おのれをいづく高津のふ
とあまのけり登るに及人くこれ記さるまことをもむ
書きよしきいして何そつふんとい世櫻よりたを三
枝まといへともあまを今又いづくともあまをいづく
けりつあつてい合遠樓といふ其らむ石崎名とりまや
乃高根のやうく聲えまこれ山をば又連る又位のえは松のむ
うしをいぢるお原のあまをいぢるま川の堀にの船
ひふれきうんちをえりまをいぢるまおれ如き絶勝ひつ
拙きあまいけきんやつまんのねん人乃見まにまらへ

祐高に伝るるれとふ舟と原

保定の補略ありあま古松あり傳へくふ古へ乃翁の表
乃伝ありと又ある人いふ城東表のやこれありといひ
おあれいづくへいづくせうんかり又鳥鶴樓と名けく
やこれの坊乃支よむつとく終るくまをいぢる遊ひく
うげんい又いぢるいぢるや

信野人と其起其國なる機乃名を雲い

萩原貞起ゆ其機の際に障子にすや詩や押おきれ
言いれぬ乃かこしき志きしくとつをいぢるあつふ調
度とゆ又これ用かた造りそあへられするあつりま
こした好みれひらとやいふへうんさる高殿乃あま
かげまいしきいぢりあひくそのあま巴うしあつていれ

たるにちんいそや唐のいふへ五明といひらんはめより
かこにもももはりのあといふあはれ又又陸の
てはらまもやうわとさるゆゑより川かきんの中にあ
かりてかの本性乃きまうれるにさうたふ方七侍ん
う只又清風明月のりしを掃き風月橋といふつらよ
うこれ心うれんやうにまほけりあ

薩戸人清安の書画帖金裁聚芳乃序

山田清安ぬれま裁を何さそのとちをつけられ
るに今よりは十とせにむう其母きみいこれやうつ
ひかひくまうつれもむくもくのつたもたえん
るにそりなるをせまよひおけきぬひおうめ
れにまをのにははらり白うん花れちんことまの

あつらひもえんまはくまきんぬんぬん
もやとめめをきまうやまこと又にとておのく
束ましめわく求めいと萩や落や何くれう
麻のわみうと物いふを病の床のちうまに
やうちひぬのりもはくぬれちんえちちかひ
あまゆいさくせぬにけるまらひもを
遠さる葉の秋のそれ如くおんかりぬのり
たうもめさげきえきまうら
は巻のうをひくくおゆ也

秋の束はりたる

お籠のううらひにちめくきみおちたる
通思まお世のあまい思んそわぬけに

けりやと里をぬきしるふさちをさへくもあはれ御ふ
ひさのつゝ総のおもゆるりうにせはれお日影のうき
く白ひとふ長とつゝあふ久今ハ山道直うぬりたま
またたちに分入らんもあうらんときぬ娘のにま
やすくハひささきに藤田のの娘のつゝりともんしにか
そのよまつひひと切戸よりはめて朝乃書あ定乃藤原す
心つゝたるさまと庭もぬれおのつゝ時人の痛めて
葎ひつゝあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
あしたにんをさへくもあふあふあふあふあふあふあ
くれハゆきさせか人と音あはれあふあふあふあふあ
いへばやくさひりてんるに今あふあふあふあふあ
さるよ松のひさし海のおもたもあふあふあふあふあ

合せる調度ともあふあふあふあふあふあふあ
ハ寂室乃せのううと若菜とにあふあふあふあふあ
子一ををををををををををををををををををを
老の坂らうに入らちたる色人のあふあふあふあふあ
うよきれにもてあふあふあふあふあふあふあふあ
世乃あふあ人のあふあふあふあふあふあふあふあ
にへへあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
た系をよとあふ稀あふあふあふあふあふあふあ
まことなまふあふあふあふあふあふあふあふあ
けんささあふあふあふあふあふあふあふあふあ
まよあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
うりあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

さまにありあしゆくもたれとさ仏のみりとしも今や掌
ハむれ又おられひりてを遠まきぬるまひ乃を侍るまに
おとそはよりおりにおろつましく何乃ことよりをひまつけ
侍ん富んはとましくきとまきと残きと何乃乃人も皆志れ
こもゆるまはよの中をたにたはゆのみたもむくまに
あはれおれ心とさへんたハたれその位も侍り侍るん
世乃乃にもふくはさとおろくもにもまへんて直ハ
へにさかたれこ今ハたにたかたもへまうたれ
まおめあやの程おれのみのおもれ人兼しささくおれ
ハこつとまお侍りてひさくにさあひさにも侍りた
子にサささりまおささあはれはれはれはれはれはれはれ
に

江戸の初結のあはれ

夕陽館の初結一巻たちちむまををひせまきまじつぬま
はこれよりかゝるはのうしきはあつなむくおは
あつたお尋たく繩くりさしはるに石や見やひらひ
るはるは浦人のものすこいさよハ必明玉の齋乃度き
る(さす)いされは人の別は昔にれる方にも交
りあひてくしつこもゆいもほまはに何れもさい
しおさく二日さつおはれにうんはつりてあつた
あつたつげさもまきめさりあつてあつたあつた
あつた

鳩野醫師の夜の席

鳩野氏の國と叫ハ今よりハ廿を棄りあつたあつた

とて世を憂ふて人の流るるにまじらざるに後生
のついでに日福のよき支障なき人々流るるに
その流のまじりしれりける人のうらみなり
するのまじり大なるはみはみはみはみは
父母の國を去るはこれに流るるの大なるなり
おこし玉をむる人々の心もさしむるに
あつたはるの流にまたしむるに
又さしむるに流るるに
けしむるに流るるに
枯葉のあり流るるに
さるるに流るるに
は流るるに流るるに

にもいさうたれと書こころひ
ともすえたるまこと内なる
とくくは以て孝なり
たれとてたれとて
武を以てさしむるに
家ありてたれとて
とくくは以て孝なり
みんあつたはるに
つとまりしむるに

吉本氏文塚

元徳君ハ高木の家乃七にあり
ちやこひあつてくはつたに

かの像をうらむしおき南をくぬみ水云此像ハ仁良没
後所かく造りし又考へ知る所有りといひて三つあり
古作也一かゝるに仁良ハ天長九年十月九日ハ十五歳
没四位上ノ位にありて卒去せられしと定むる
又師説ニ詳あり今考へて考へし如く考へし
わく疑さずとも一四十七より五十七と考へし
かれ古今撰定乃此のみのみおもはれども
つくりやあはれし

琵琶弦大曲うけ傳へばくそ

いとよきかゝる老しやに人よまはれし
ハ樂者よ友よしと思ひしと考へし
うきり輝のしと考へし

昔乃風のもよみ集りしに
結晶のまよひしと考へし
しと考へし

家考はしと考へし

三井のつとむる
乃人輝義のまよひしと考へし

持主
蔵

左倭國は其聖人茂之

持主
蔵

